

基本CG10枚+差分+α計63枚+文字なしver

憧れの女性(千鶴さん)と初セックス



# 相○千鶴と夜の肉体関係



まだ少し暑さが残る夏の夜……

俺は今、ある人と待ち合わせをするために  
近くの街にある○○ビルの前にいる。

時間が時間だけに人通りは少なく、仕事帰りであろうサラリーマンや  
遊びまわってる若者たちがちらほらと歩いているだけだった。

「はあ〜緊張するなあ……なにせ憧れの人とついに俺は……」

俺の憧れの人・・・『相沢千鶴』さん。  
優しく、おっとりとしていて、しかもとても強い女性である。  
彼女は海の家うみのいえの経営者兼調理担当で  
日中はいつも慌ただしく仕事に勤しんでいる。  
そして俺はその店の常連客で  
そこそこ親しくさせてもらっている間柄だ。



そんな彼女を先日、勇気を振り絞ってラブホテルに誘ってみた結果  
なんとOKをもらえた！  
これは俺にとって人生最大の好機。  
まさかあの千鶴さんとセックスができるなんて・・・

今日がその約束の日なのだが

気持が完全に舞い上がってしまっているせいで待ち合わせの時間より30分も早く着いてしまった。

緊張でドキドキと激しく鼓動を打つ心臓と

歓喜のあまり顔がついニヤけてしまいそうになるのを抑えながら千鶴さんが来るのを待つ。



「○○さん！」

待ち合わせ時間の約10分前、背後から俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。  
千鶴さんだ！

「ごめんなさい。待ったかしら？」

「い……いえ……俺もさっき着いたばかりですから!!」



いつも店で見ている仕事着姿とはまた違った魅力がある千鶴さんの外出着姿。  
清楚でありながらどこか大人の色気が漂う雰囲気を感じられる。

とても綺麗だ……

「そっ……それじゃあ早速ラブホテルに行きましょっか？」

「ええ、そうね！」

緊張と興奮で胸を高鳴らせながら俺は千鶴さんとラブホテルへ向かった。



しばらく歩いた先にあるラブホテルの一室……  
この官能的な空間に俺と千鶴さんの2人きりであるという事実には俺の興奮は更に高まる。  
「お、思ったより綺麗な部屋ですね……！」  
「うふふ……そうね」  
キョロキョロと落ち着かない俺とは対照的に千鶴さんは慣れた感じで落ち着いている。

「とりあえず私、シャワーを浴びてこようかしら……○○さんも一緒にどう？」  
「いいいえ……俺は家出る前に浴びて来たので大丈夫です！」  
「そう……それじゃ悪いけど少しだけ待っててね！」  
そう言うのと千鶴さんは浴室へと入っていった。





俺がいるベッドルームまで聞こえてくるシャワーの音。

壁一枚隔てた向こう側では千鶴さんが裸でシャワーを浴びていると思うと悶々とした性的欲求が沸き上がってきて、さっきからずっと勃起がおさまらないでいる。

緊張と興奮でそわそわとしながらも俺は千鶴さんが出てくるのを待った。



「お待たせ！」

「っ!？」

浴室からバスタオル一枚の姿で出て来た千鶴さんを見て一瞬ドキッとすする。しっとりとした肌と髪はとても艶っぽく、そしてバスタオルから覗く胸の谷間と太ももがとにかく扇情的だ。

「ふふ……久しぶりだから私もちよつとドキドキしてきちゃったわね」

頬を赤く染め、欲情しているような様子の千鶴さん。

そして緊張でガチガチになってる俺の為に千鶴さんは積極的に行為を促してくれる。

「それじゃあ、○○さん……セックスしましょうか」

「は……はい……!!」

い……いよいよだ……!!





千鶴さんはゆっくりとした動作で自身の体に巻いていたバスタオルを取った。

「……っっ!!」

露わになった千鶴さんの裸体を目の前にし、俺は思わずゴクリと息を飲む。



大きすぎず小さすぎない形の良い胸、ピンク色の乳首と乳輪、ほどよくくびれた腰尻から太ももにかけての艶めかしい曲線、陰毛の生えた股……美しくも生々しい千鶴さんの裸に魅了され俺の目が釘付けになる。



「あんまり体をじろじろ見られるとちよつと恥ずかしいわね……」  
少し恥ずかしそうに微笑みながらモジモジする千鶴さん。  
「あ……す、すみません……!?!」

「ううん、いいのよ。気にしないで見てくれても……」  
「は、はい……」

心なしか千鶴さんの吐息が乱れている。  
自分の裸を見られて興奮しているようだ。





俺も着ている服を脱ぎ捨て、お互い裸のまま体を引き寄せ見つめ合う。  
初めて触れる千鶴さんの体……スベスベの柔肌で、少し冷たくて、どこか儂い。

今まで千鶴さんとこんな顔に近付けたことがなかった。

紅潮した頬と綺麗な瞳、それにシャンプーの良い匂いがする。

興奮と緊張がピークに達した俺に千鶴さんは優しく甘い声で囁きかける。

「キスしましょう」





俺は情欲の赴くまま千鶴さんの唇に自分の唇を重ね合わせた。

「ちゅっ……ん……ちゅ……ん……」  
千鶴さんの柔らかい唇と微かに漏れる声の方が更に俺を興奮させる。

「ちゅ……ハア……ハア……ちゅっ……ん……」

お互いの舌を絡ませ……吸い……唾液が混ざり合う。  
熱く濃厚なディープキスに俺の呼吸は荒くなり、顔が熱くなる。  
頭の中がとろけそうだ。

ちゅっ

ちゅっ





俺の興奮は治まらず、尚も激しく千鶴さんの唇と舌の感触を求め続ける。

「ハア……ハア……あむ……ちゅ……ちゅっ……ん……」  
千鶴さんも性的興奮が高まっているのか、更に息が荒くなっていく。

口の中で交換した千鶴さんの唾液を飲む。  
そして同じように千鶴さんも俺の唾液を飲む。  
そんな淫猥で刺激的な行為に俺は虜になる。

ハア

ん……

ちゅ

ちゅ

ハア

あむ……



しばらく熱いディープキスを交わした後  
情欲が冷めないまま後ろ髪を引かれる思いで唇を離した。

「ふふ……○○さんのキス、とても激しいわね」  
「千鶴さん……」

千鶴さんは少しはにかみながら、うっとりとしたエッチな表情を見せる。  
普段の清楚でおっとりとした雰囲気とのギャップにドキッとした。





「○○さん……ベッドに横になって」  
「はい……」

キスの余韻で頭の中がボーっとしていた俺を  
千鶴さんが優しくベッドに導く。





く  
にゅ  
にゅ

横たわる俺の体に千鶴さんは自身の体を密着させそして俺の肉棒を優しく握りゆっくりと上下に動かし始めた。  
「……っ!?!」ビクッ  
「○○さんの体……凄く嬉しいわね」  
「ふはは……き、鍛えてますから……  
はあ……はあ……」

ああ：千鶴さんの柔らかい胸の感触と体温が俺の体に伝わってくる。それに肉棒を弄る手つきが程良い加減でとても気持ちが良い。



くた  
くた

次に千鶴さんは俺の乳首を舐め始めた。  
「ハア・ハア・」ちゅく、ちろちろ時には激しく、時には優しく緩急をつけるように俺の乳首と乳輪を舐め責める。

「うっ…はあ…はあ…はあ…」

な、なんて気持ち良いんだ。乳首とサオを同時に責められるこの快楽…こんなの初めてだ。オナニーでは絶対に味わえない。

ちゅく  
ちろ  
ちろ



く にゅ  
にゅ

更に千鶴さんは俺の乳首を吸ったり舌で転がしたりして愛撫する。

「ちゅっ……ハア……ハア……ちゅ……」  
ちゅく、ちゅく、ちろちろ  
「はあ……はあ……はあ……」

ちゅく  
ちゅく

俺の呼吸は更に荒くなり、快楽も増していく。  
尿道からガマン汁も出て来た。  
このままでは本当に射精してしまいそうだ。



千鶴さんの唾液で濡れた俺の乳首は  
とても敏感になっていた。  
「はあ…はあ…はあ…  
ああ…気持ち良い…」  
「ふふ…そう?」

にゅ  
にゅ  
にゅ

ハア

にゅ

ちゅ  
ちゅ  
ちゅ

「も、もう…出さうです…」  
「あら、どうしましょうか?」  
「このまま出す?それとも今度は口ですか?」  
「はあ…はあ…口でお願いします…」  
「まだだ…まだ射精するわけにはいかない。  
俺は千鶴さんにもっと色々やってもらいたいんだ。」



千鶴さんがフェラの体勢に入る。  
こうやって間近で自分のモノを凝視されるのは  
やっぱり恥ずかしいものだ。



「あ・あまり大きくはないですが・・・」

「うふふ、大きさは関係ないわよ。」

「こういうのってやっぱりお互いの気持ちが一番大事だと思うの。」

「それに○○さんの充分大きいわ！」

「自信無さげに謙遜する俺を引き立て、褒めてくれるとは・・・」

「やっぱり優しいなあ千鶴さんは。」

「ずっとリードされっぱなしだが今は千鶴さんに身を委ねていたい。」



千鶴さんは舌を使って撫でるように竿と玉袋を舐め始めた。



「ハア……ハア……ん……」っ！……ちろちろ

「はあ……はあ……はあ……」

竿と玉袋を伝う千鶴さんの息と舌の感触に肉棒は熱くなり  
ビクビクと反応する。

もうこの時点でかなり気持ちいい。

ん……

ん……

ちろちろ



竿をひとしきり舐めた後、千鶴さんは肉棒を口に含んだ。

「ん……ん……ん……」

「はあ……はあ……ああ……」

ああっ、妻い……生暖かい口の中で肉棒を唾液で濡らされ舌で亀頭をペロペロと舐められている。

んっ

そして更に千鶴さんはゆっくりと頭を上下に動かし始めた。

「ん……ん……ん……ん……ん……」ちゅぶ……ちゅぶ……

千鶴さんの口の中で優しく刺激され

股間だけじゃなく体中に今までにない快感が押し寄せる。

「はあ……はあ……はあ……ああ……気持ちいい……はあ……はあ……」

普段、尿や精子を出してる俺の汚い肉棒を憧れの女性に

啜えてもらうという背徳感と喜びが俺を更に興奮させる。

んっ

ちゅぶ

ちゅぶ



股間の快感が強くなってきたのに合わせるかのように千鶴さんもストロークを長く、そして早くする。

「んっ……んっ……んん……んっ……」ちゅぶっ……ちゅく……ちゅく……  
「はあ……はあっ……はあっ……ああ……妻い……」

ん……

ん……

更に奥まで啜え込まれ吸いつかれた肉棒は千鶴さんの唇と舌で刺激され激しい快感をもたらす。あまりの気持ち良さに体が硬直し、精子が昇ってきた。

んん……

ちゅく

ちゅく  
ちゅく



「ああ……千鶴さん……で……出そうです……うっ……!!」  
ドプッ……ドクン……ドクン……  
「んんっ……!!」



あまりの気持ち良さに耐えきれず  
千鶴さんの口の中に射精してしまった。  
ビクンビクンと脈打ちながら千鶴さんの口の中に精液が流し込まれ  
一瞬、電流のように体中に快感が走り抜けた。

ポッ



「はあ……はあ……はあ……」  
射精後、俺は幸福感と良い感じの脱力感に浸っていた。  
「んん……」

俺が出した精子を口に含みながらティッシュを取る千鶴さん。

ト……

「あ……す、すみません……回の中で出してしまって……」

ああ、なんだか罪悪感が……

しかし千鶴さんはティッシュに精液を吐き出した後、俺に微笑みかける。

「ううん、いいのよ！でも量が多くてちよつと飲みきれなかったわね」





一度射精したというのに俺の股間は勃起状態を保っている。  
俺の体はまだ千鶴さんを欲しているのだ。

「あ、あの……千鶴さん……今度は俺にやらせてもらっていいですか？」

「ええ、いいわよ！それじゃ私、横になった方がいいかしら？」

「はい、お願いします！」

千鶴さんは『お好きにどうぞ』と言わんばかりに  
自分の裸体を無防備に横たえる。



俺は恐る恐る千鶴さんの両胸に触れ、ゆっくり円を描くように揉んでみた。

「はあ……ハア……ハア……あ……ん……ハア……ハア……」  
手のひらに伝わる胸の感触……  
弾力があり、それでいて柔らかく  
とても揉み心地が良い。



「ハア……ハア……ハア……あ……あ……  
気持ちイイ……ハア……ハア……」  
ああ……千鶴さん、感じてる……  
乱れた息遣いと微かに漏れる  
喘ぎ声が物凄くエッチだ。





俺は夢中になって千鶴さんの胸を揉んだ。  
「ん……ハア……ハア……んっ……あ……ハア……ハア……」  
乳首を勃起させ、気持ち良さそうに  
体を反応させる千鶴さん。

んんん  
ハア

眉をひそめながら感じている表情も凄くエロい。  
そんな千鶴さんを見ると俺もますます興奮してくる。

ハア  
んんん  
ハア





次に俺はツンと勃った千鶴さんの乳首を舐めてみる。  
「ああっ……ん……」

さっきよりも感じ方が激しい。  
千鶴さんは乳首がとても敏感なようだ。  
そして俺は更に激しく舌を動かし乳首と乳輪を舐めたり吸ったりした。

「んんっ……ハア……ハア……ん……ああっ……ハア……ハア……  
はあっ……あっ……ハア……ハア……乳首……気持ちイイ……ハア……ハア……ハア……」  
快楽に身を振り、呼吸は荒くなり、体が汗ばみ、喘ぎ声が漏れる。  
その姿はととても艶めかしく、俺は尚も夢中で千鶴さんを愛撫し続けた。





「んっ……ああっ……ハア……ハア……ハア……あっ……」  
俺はまるで子供ののように乳首にしゃぶりつく。  
悶えるように感じている千鶴さんを見ると俺の欲求は更に刺激され  
もっとやりたくなってしまう。

ちゅん  
ちゅる

ビクン  
ハア……ハア……

ビクッ  
ハア……ハア……

誰よりも強いはずの千鶴さんがこんなにも弱々しく  
体を震わせ喘ぐなんて……



「ハア……ハア……ハア……ん……ん……あ……」  
「千鶴さん……乳首責められるの好きなんですか？」  
「ええ……ハア……ハア……私、乳首感じやすいのよ……」

あ……  
ん……

びりっ

乳首責めがよっぽど気持ち良かったのか  
千鶴さんは恍惚の表情を浮かべる。



胸の愛撫で千鶴さんの体が火照ってきたところで  
今度はアソコも愛撫してみたいと思った。

「千鶴さん……ア、アソコも弄っていいですか……？」  
「ええ……」

俺は千鶴さんの下半身へと体を移し  
千鶴さんもそれを望んでいたかのように  
自ら股を開き、受け入れる体勢をとった。





初めて生で見た女性器……  
『す、すげー……千鶴さんのアソコってこうなってるんだ……。』と  
ドキドキしつつも指で弄りながら興味津々に観察してみた。  
綺麗にピンクがかった色で、生々しい形をしている。

ハア……

ハア

くひゅ

「千鶴さんのア、アソコ……もう濡れてますね……」  
「ええっ？ うふふ……ちよつと恥ずかしいわ……」  
さっきので濡れちゃったみたいね……」  
恥ずかしそうに、でも少し興奮した様子で  
千鶴さんは答える。



ぬるっ……

「ん……」

俺はゆっくりと千鶴さんのアソコの中に指を入れてみる。  
膣内が愛液で濡れているためすんなり入った。  
千鶴さんのアソコの中、温かくてヌルヌルしている。

ハア  
ハア  
ハア

クチュ  
クチュ

ハア  
ハア  
ハア  
ハア

更に俺は根元まで入った指で膣内をクチュクチュと  
ヤラシイ音を立てながらゆっくりと掻き混ぜた。

「ん……ハア……ハア……あ……ん……ハア……ハア……」

千鶴さんは微かな喘ぎ声と共に愛液をいっそう溢れさせる。



次に俺は愛液で濡れたアソコを舐めてみる。

「はあ……ん……ん……あ……あ……ハア……ハア……」  
千鶴さんのアソコと愛液の味は微かに甘苦く  
ほぼ無臭だったが、舐めていると何故だかとても興奮する。

小陰唇やクリトリスも入念に舐めていく。

「あ……あ……ハアハア……あ……あ……ん……ん……ハアハア……」  
体を艶めかしく振らせ、悶えるように感じる千鶴さん。  
やはりクリトリスは特に敏感なようだ。

ビクッ  
ッ

ハア  
ハア  
はあ……ん……ん……

ハア  
ハア……ん……ん……

ビクッ  
ッ

レロ  
レロ  
ちゅっ  
ふっ



ちゅくっ…ちゅっ…ちゅくちゅくちゅく……じゅる…  
アソコへの愛撫は激しさを増し、舌で舐める、吸いつく、膣口に舌を入れる等で責めていく。

「あっ…ハア…ハア…ハア…ん…ああ…ハア…ハア…ハア…ハア…ああっ!？」

あっ  
ハア  
ハア

あ  
ハア  
ハア

びん

千鶴さんは尚も激しく悶え、快楽に喘ぐ。  
そんな千鶴さんを見ると俺も性欲を抑えきれず  
ひたすら股間がウズウズしてくる。

ん  
ハア  
あ  
ハア

ちゅ  
びん

ちゅ  
ちゅ  
ちゅ



「千鶴さん……お、俺……もう挿れたいです……」  
「ええ……いいわよ……それじゃ私が上になりましょうか……?」  
「はい……」

俺も千鶴さんも体が完全に出来上がった状態だ。  
お互いの体がお互いの性を欲しがっているのかもしれない。





「私、今日安全日だからゴムなしでもいいけど……」  
「そ、それならゴムなしでお願いします……」  
「ふふ……我慢できなくなったら中で出してもいいわよ！」  
「はい……！」

ハア

ハア……

くちゅ、

千鶴さんは俺の肉棒を掴み、自身のアソコへと誘導する。  
いよいよ俺のモノが千鶴さんの中に……なんかドキドキする。





ぬるっ……ズズズズ……

「はあ……あ……ん……」

ゆっくりと肉棒が千鶴さんの濡れた膣内へと入っていく。

「ハア……ハア……大きい……」

「う……あ……」

ハア  
ハア

ハア  
ん……

ハア……

おお……凄い……

千鶴さんの生暖かくて柔らかい膣の中で俺のモノ全体が包み込まれ締め付けられている。

あまりの性的興奮に俺の肉棒はドクドクと熱くなり、千鶴さんの膣内もビクビクと

ビクついてる。

そして何より、千鶴さんと繋がっているという感覚が俺の興奮を更に高めている。

ズズ……



千鶴さんはゆっくりと自ら腰を前後に動かす。

「んっ……ハア……ハア……ハア……んん……ハア……ハア……あ……ハア……ハア……」  
「うう……ハア……ハア……う……あ……ハア……ハア……ハア……ハア……」

千鶴さんが動いたたびに波打った膣内が俺の肉棒を刺激する。  
愛液がローション代わりになって尚更気持ちが良い。  
頭の中が快楽でトロけそうだ。



あ……  
ハア……  
ハア……

んん……  
ハア……  
ハア……

あ……  
ハア……  
ハア……

ぬちゅ……  
ちゅ……



千鶴さんは今度は上下に体を動かして肉棒を責める。

ずちゅっ……ずちゅ……ぬちゅ……

「はっ……あ……ハアハア……あっ……ハア……ハア……あん……」

「ハア……ハア……ハア……ああ……う……ハア……ハア……」

あ、ハア

ハア

あん

ハア、あん、ハア……

ずちゅ、ずちゅ

上下に揺れる千鶴さんの体と胸、そして気持ち良さそうに喘ぐ声が物凄くエッチだ。そして肉棒は波打った膣内で更に激しく刺激され大きな快感を生み出し俺を悶えさせる。







俺達は体を入れ替え、後背位の体勢になった。

「ハア…ハア…ハア…ハア…いいわよ……」  
「(ゴクリ)は、はい……」

ハア

ハア…

ハア

千鶴さんの汗ばんだ体に張り付いた髪と  
綺麗で柔らかそうな尻があまりにも艶っぽくて  
俺は思わず生唾を飲み込んだ。  
今度は俺が肉棒で千鶴さんを責める番だ。



俺はゆっくりと千鶴さんの濡れたアソコに肉棒を挿入した。

ぬちゅ：ずぬぬ……

「んっ……はあ……」

肉棒が入っていくときの千鶴さんの微かな喘ぎ声と弱々しく振った体がとても愛らしい。

んっ……

それにスベスベで柔らかい尻が汗でしっとりしていてそれでいて物凄く触り心地が良くそれが俺の情欲を更に増幅させていた。

ズズ……



俺は自分の腰をゆっくりと動かして千鶴さんのアソコを突いた。  
「んっ……ああっ……ハア……ハア……あっ……あっ……あ……」  
「ぬちゅ……ぬちゅ……ずちゅ……」と膣内はイヤらしい音を立て  
それに合わせて千鶴さんの体は揺れ、喘ぎ声を漏らす。

ああ……

そして俺の肉棒も千鶴さんの締りのいい膣内に擦られて  
たまらなく気持ち良い。

ああ……  
おん……

ぬちゅ  
ずちゅ







俺達は更に体勢を変え、正常位の格好になった。  
千鶴さんは自ら股を開き、俺の肉棒を受け入れるようにアソコを曝け出す。

ハア

ハア

ハア...

「千鶴さん……」

「○○さん……」

千鶴さんは欲情した表情で俺の肉棒を欲しがっているようだった。  
そして俺も千鶴さんのアソコに挿れたくて堪らなくなっている。



ぬちゅっ...ズズ...

「んっ...んっ...ああ...ハア...ハア...ハア...」  
俺は千鶴さんに覆いかぶさるような格好になり  
再度肉棒を膣内へと挿入した。

んっ...  
びゅっ

あ...あ...

ハア...  
ハア...

お互い感度が高まっていて、体が過敏に反応する。  
挿入しただけで体が過敏に反応する。

ズズ...



俺は腰を動かし千鶴さんのアソコを突いた。  
ずちゅっ……ぬちゅっ……ぬちゅっ……

「あっ……はあ……あんっ……あんっ……ああ……」

あん、

あん、

「ハア……ハア……ハア……」

体を揺らし喘ぎ声を漏らす千鶴さんに性欲を掻き立てられながら  
俺は一心不乱に腰を動かす。

あん、

ずちゅっ  
ぬちゅっ







「ああ……で……出る……」

びゆるっ……びゆる……どく……どく……

俺は耐えきれず絶頂し、千鶴さんの膣内に精液を流し込んだ。

はぁ  
びくっ

びくっ

「はぁっ……んっっ……あっ……あぁっ……!!」

そしてほぼ同時に千鶴さんも体をビクンビクンと痙攣させ

アソコから潮を吹かせながらイッてしまった。

あぁ……!!

プニッ

ドブッ……



千鶴さんの膣内に精液を出し切った後、ゆっくりと肉棒を引き抜く。  
ぬちゅゅ……ぬぷっ……

「ん……ああっ……!!ハアッ……ハア……ハア……ハア……」

絶頂時の体の痙攣が軽く続いた後、千鶴さんはまるで運動後のように  
ハアハアと胸を上下させ、まどろみの中にいるような恍惚の表情を見せている。

ん……ハアハア

びり

あ……あ……

ハアハア……

そしてヒクヒクと開ききった膣穴からは精液と愛液が溢れ出していた。

「ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……」

俺も千鶴さん同様、息が荒くなっている。

ほどよい疲労感と脱力感……そして最高の幸福感が俺の体を包み込む。

と……



「うふふ……気持ち良すぎてイっちゃったみたい……」

満足したようにウットリとした表情と甘い声で囁きかける千鶴さん。

「お、俺も凄く良かったです……こんなに興奮したの初めてです……」

「そう言ってももらえると嬉しいわ……!」

ハア

ハア

ハア

ハア……

「あの……中に出しちゃってすみません……我慢できなくてつい……」

「ううん……いいのよ、安全日だし中に出してもいいって

言ったの私なんだから気にしないで!」

「千鶴さん……」





そして俺と千鶴さんは少しの間、甘い時間を過ごした後  
一緒にシャワーを浴びてからラブホテルを出た。

憧れの人との初セックス……  
まるで夢のような時間が終わってしまった。





ラブホテルからしばらく歩き、その別れ際に千鶴さんが口を開く。  
「〇〇さん、今夜は誘ってくれてありがとう……とても良かったわ」  
「いえ、俺の方こそ……その……付き合ってくれてありがとうございます……  
千鶴さんのおかげで良い思い出になりました」  
「ふふ……私もよ！」



また明日になれば海の家で会えるというのに名残惜しいような少し寂しい気分になる。  
ずっと一緒にいたい……そう思える魅力が千鶴さんにはある。



「あ、あの…千鶴さん…」

「…?」

俺は躊躇いつつも思っていたことを言ってみる。

「また…誘ってもいいでしょうか…?」

あまりガツガツしすぎると嫌われるのではないかと不安になったが俺はどうしてもまた千鶴さんと…



しかし俺の心配をよそに千鶴さんは柔らかい口調で応える。

「ええ、もちろんよ…!」

「っ!」



「私……○○さんにならまた抱かれてもいいわ……  
だから○○さんからの誘い、いつでも待ってるわね！」  
「千鶴さん……」



千鶴さんの優しく包み込むような笑顔に俺は思わずドキッとした。  
憧れの女性にそう言ってもらえるなんて……  
俺はますます千鶴さんに心を惹かれる。





「それじゃあ、またね!○○さん」  
「は、はい……千鶴さん……さようなら」





そして俺と千鶴さんはそれぞれ別々の家路を歩いて行った。



家に帰宅し自室にて…  
俺の頭の中は夢見心地のようにまだボーっとしていた。  
今夜体験した刺激のかつ至福のひとときは俺の心と体を  
確実に骨抜きにしたようだ。

初めて見た千鶴さんの裸…  
性的興奮を刺激する肌、舌、アソコの感触…  
扇情的な良い匂い…  
気持ち良さそうに感じる千鶴さんの表情…  
行為中の甘い声と喘ぎ声…

普段は決して見ることができない千鶴さんを  
体全体で感じる事ができた興奮と幸福感を噛みしめている。

千鶴さんとセックスできたなんて、まるで夢のようだ…





翌日……俺はいつものように千鶴さんが働いている海の家に行った。  
店の中は相変わらず客でいっぱいだ。



「あら、○○さん。いらっしやい！」

「ど、どうも。こんにちは」

どうしても昨日見た千鶴さんの裸が……

千鶴さんとのセックスが頭にチラついて照れてしまう。



「大丈夫？○○さん。顔が赤いわよ……」

「あっ……いえ、これは別に……な、なんでもないです!!」

俺の心境を知ってか知らずか千鶴さんが心配そうに言った。

「そ、そういう千鶴さんこそ顔が赤いですよ!」

「えっ!?!そ、そうかしら?うふふ……」

あ……千鶴さんもちよっと恥ずかしがってる。



「ねえ、○○さん……」  
「……?」

千鶴さんは他の人に聞こえないように小さな声で俺に囁きかける。



「また、よろしくね!」  
「は……は……!」



そうして俺と千鶴さんはお互いに心と体を許せる関係になっていった。

END





海の家  
れもん





























































































































































































































海の家  
れもん







